

ふるさと団体&農山漁村協働パートナーの 参加者募集中!

協働パートナーに関するお問い合わせ

徳島県 農林水産部農山漁村振興課 中山間地域振興室 農村交流担当
〒770-8570 徳島県徳島市万代町1丁目1番地 TEL088-621-2486

ふるさと団体に関するお問い合わせ

管轄局	担当電話番号	管轄地区
徳島農林事務所 〒770-0855 徳島市新蔵町1丁目67 徳島合同庁舎	農村整備第一担当 088-626-8538	鳴門市・勝浦町・上勝町 佐那河内村・神山町
吉野川農林事務所 〒779-3304 吉野川市川島町宮島736-1 吉野川合同庁舎	農村整備担当 0883-26-3784	吉野川市・阿波市
阿南農林事務所 〒774-0030 阿南市富岡町あ王谷46	農村整備第一担当 0884-24-4228	阿南市
美波農林事務所 〒779-2305 海部郡美波町奥河内字弁才天17-1	農村整備・漁獲管理担当 0884-74-7397	牟岐町・美波町・海陽町 那賀町
美馬農林事務所 〒779-3602 美馬市脇町大字猪尻字建神社下南73	農村整備担当 0883-53-2286	美馬市・つるぎ町
三好農林事務所 〒778-0002 三好市池田町マチ2415	農村整備担当 0883-76-0662	三好市・東みよし町

とくしまの農山漁村



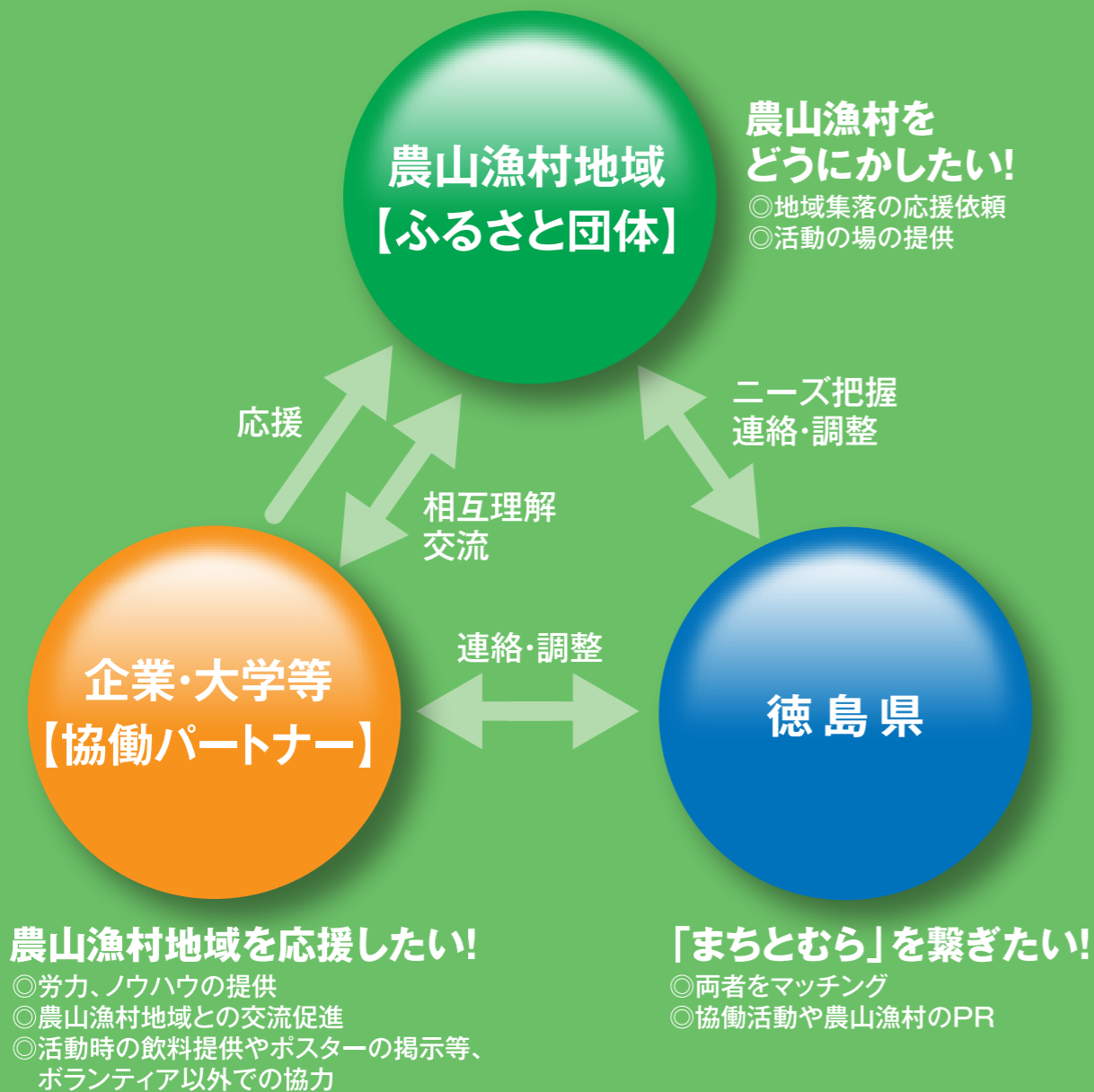
Instagram更新中!

とくしま農山漁村 ふるさと 応援し隊事業

徳島の農山漁村を
「協働」の力で元気に!

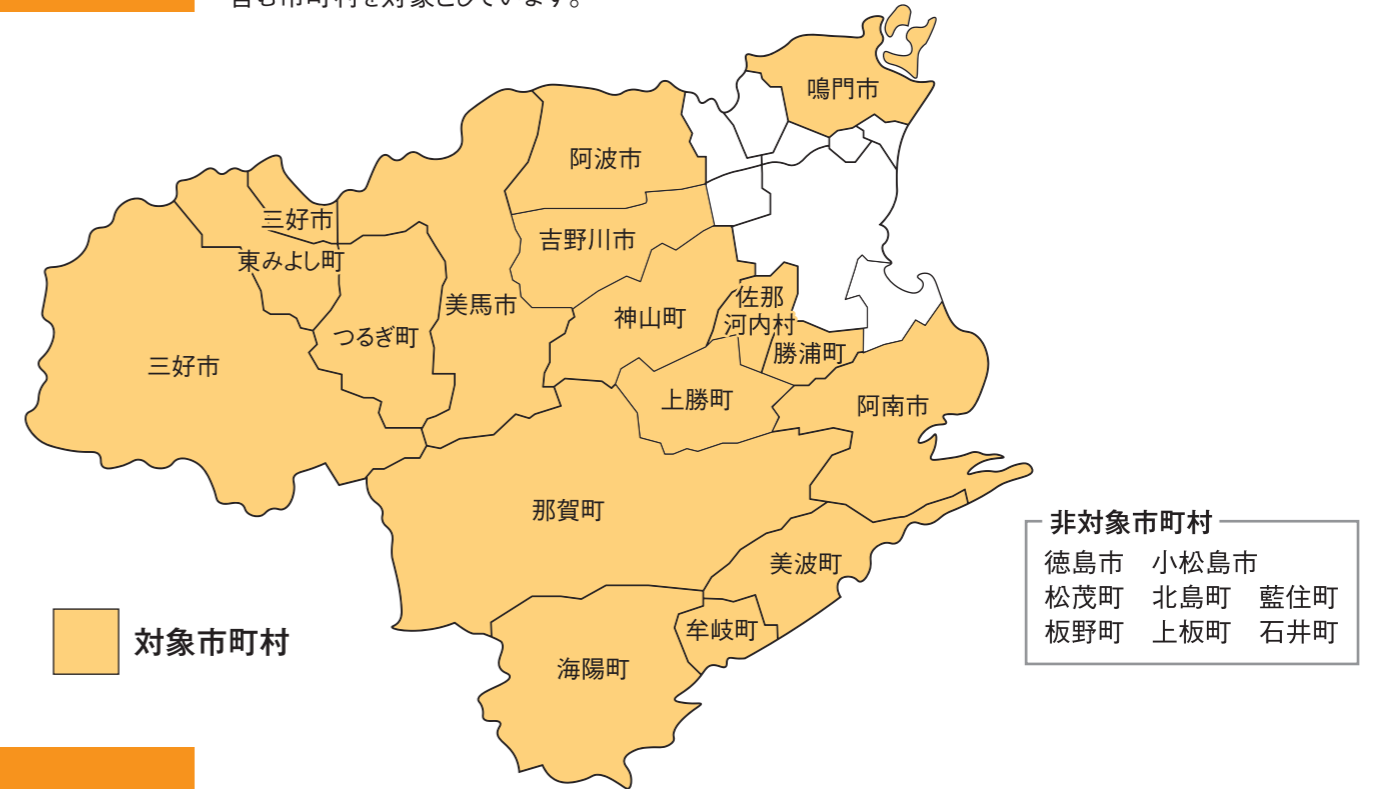


徳島県が推進する「とくしま農山漁村(ふるさと)応援し隊事業」。
 集落道の草刈りや地域のお祭りなど、農村保全や地域活性化の
 取り組みで「応援を受けたい」と考えている農山漁村の団体(ふるさと
 と団体)と、社会貢献をしたい、地域交流を活発にしてビジネスにも
 繋がりたいなどの理由で「応援したい」と考えている企業・大学・NPO
 法人等の団体(農山漁村協働パートナー)を結びつけて協働活動
 を行い、地域の魅力を未来へ繋ぎ、さらに農山漁村と都市の人と
 人との交流を目指す事業です。

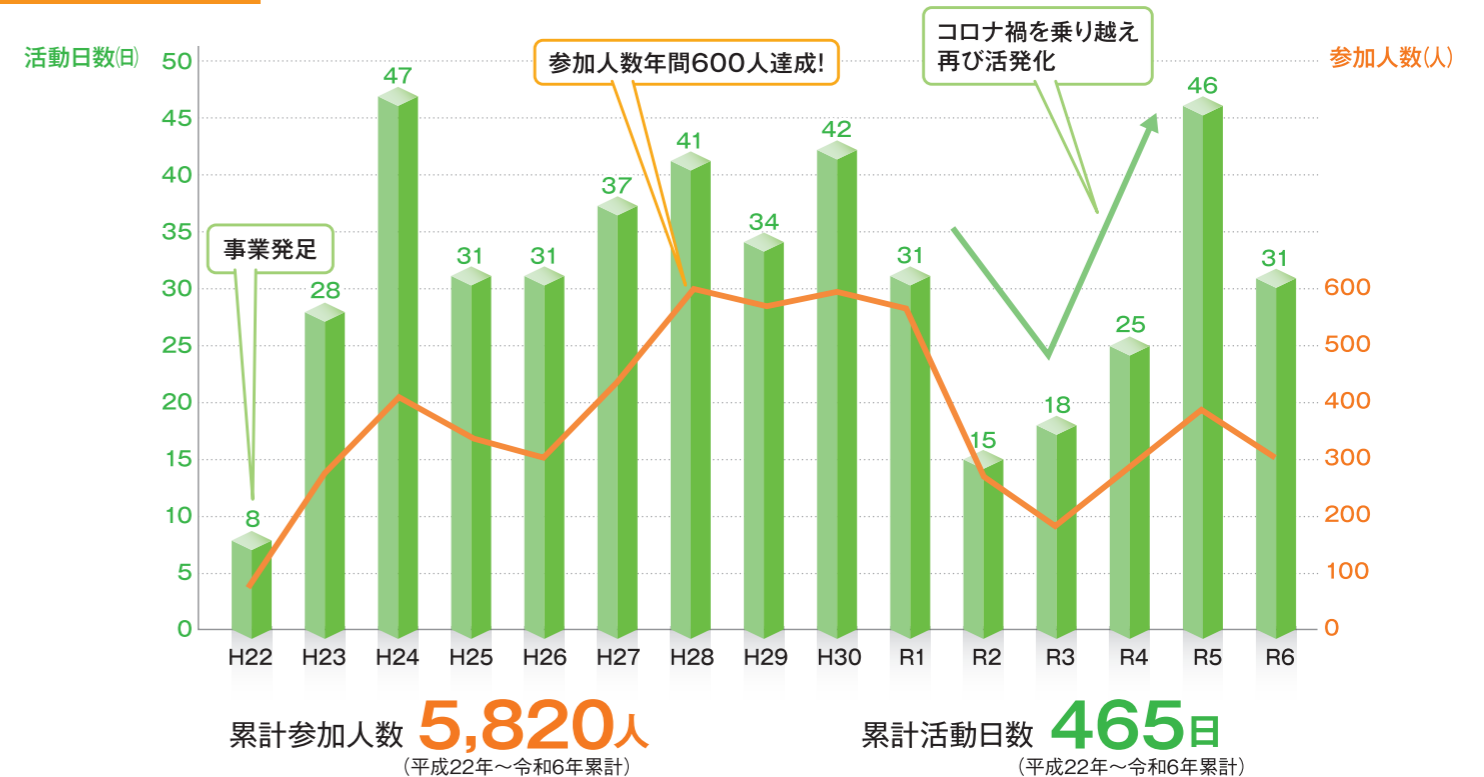


活動対象地域

本事業は「離島振興法」、「山村振興法」、「過疎地域自立促進特別措置法」、「特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律」の4法に指定された中山間地域を含む市町村を対象としています。



応援し隊事業の歩み





応援を受けたい!
 ふるさと団体の方にお話しをお聞きました。
**棚田保全活動とスサづくりの
 伝統継承を通して郷に元気を創りたい**
 NPO法人 郷の元気 代表理事 澤田俊明さん
 (69歳・愛媛県宇和島市出身)

「NPO法人郷の元気」は持続可能な地域づくりに寄与することを目的とし、農山漁村地域におけるまちづくり活動の中間支援を行っている。活動の軸となっているのは「上勝町の棚田保全」の取り組みだ。「国の重要な文化的景観」にも認定された上勝町の棚田(景原の棚田)は、高齢化や人手不足により、景観の維持や歴史・文化の継承が危ぶまれている。「持続的に発展していくには、2つの保全が重要です。環境の保全、そして地域・集落の保全です」と話す代表理事の澤田さん。2005年にNPO法人を設立し、棚田を貸し出し個人や団体に農作業体験と地域交流を提供する「棚田オーナー制」や、遊休農地を活用した「集落」ビジネスの支援などを行う。

**「環境と地域・集落の保存」
 で郷に力を**



棚田の遊休農地を活用したキャンプ地づくり

『とくしま農山漁村(ふるさと)応援し隊』の活用のおかげは、5年前の棚田ライトアップイベントのライト撤去作業だった。
 「多くの人が棚田の魅力を知ってもらえたら、というところから始まりましたが、手伝っていただけでなく、地域のことや取り組みについて意見交換できました」。
 「また昨年は応援し隊の力を借りて、遊休農地の草刈りを行いました。みなさんに手伝わってもらった土地は、『棚田キャンプ』という集落収入に繋げるキャンプ場になります。集落の人達の合意もとれたので、これから多くの人に利用してもらえようPRしていきます」。

**応援し隊の力で遊休農地を
 「棚田キャンプ」に**



鳴門市のスサづくりの施設見学

「高齢化で、来年どうなるか分からない棚田はまだあり、どう活用していくかが課題です。目標は、棚田に住んでくれる人を増やすこと。そしてスサづくりでは、市や自治体の力を借りるなど、伝統産業として地域に残していける方法を模索していきます」。
 棚田の風景、昔ながらの伝統的なスサづくり。100年を超えて続いていたこれらの風景を後世へ残すため、澤田さんたちの挑戦は続いていく。

**持続発展のための
 協働・交流を増やしたい**

新たな活動として、昨年からは鳴門市の「スサづくり保全」のための取り組みも開始。葦の収穫作業や交流会に応援し隊が参加した。
 「日本建築に欠かせない土壁に入れる砂になる『スサづくり』は、全国で名古屋と徳島の2箇所しか行われていません。そのため機械も市販のものではなくオーダーメイドで、流通経路も限られています。職人も高齢化しているので、地域に残る素晴らしい伝統を継承していくための『盛り上がり』を生み出すことに、これからも力を貸して欲しいです」。

**全国に2箇所しかない
 伝統産業を伝えて守る**



応援を受けたい!

ふるさと団体の方にお話しをお聞きました。
**力を合わせて、力を借りて
 「坂本」をもっと元気に!**

さかもと元気ネットワーク「坂道・石垣活かし隊」
 隊長 杉本卓司さん(52歳・勝浦町坂本出身)



さかもと坂道マラソンに参加するランナー

「さかもと元気ネットワーク」は、「自分たちの力で坂本をもっと元気にしよう!」と活動する住民有志の力で2016年に誕生した。
 「隣校になった坂本小学校が、2002年に『ふれあいの里さかもと』という地域拠点に生まれ変わり、地域の沈んだ空気が払拭されました。そこから住民主体の地域づくり活動が活性化し、その後の住民参加のワークショップを機に『さかもと元気ネットワーク』が発足しました」と話すのは、坂本で生まれ育ち、地元のためになにかやりたい!と考える杉本卓司さん。
 活動の柱は、さかもと坂道マラソンと「さかもと着物祭り」。地域の激坂を逆手にとったスポーツイベントと、古い着物に再び光を当てて賑わいにつなげる創意工夫は、全国から注目を集め、令和6年度の「地域づくり表彰(国土交通省)」では国土交通大臣賞を受賞した。

**地区のマイナス要素を逆手に!
 諦めない力で国土交通大臣賞受賞**



「さかもと坂道マラソン」はその名の通り、急な坂道が続くルートだ。最大高低差224メートルの激坂を上り下りし、集落を一周する。特産のみかんが色づ

**地域の人と応援し隊で
 マラソンロードを盛り上げる**



大会に向けて行われたコースの清掃作業

坂本地区全体の人口は4000人を切り、高齢化率は60%近くある。過疎化と高齢化が進み、実働人員が限られるため、イベントの継続や活性化に外からの力は欠かせない。
 「ターンで移住した人が『坂本みたいな場所はない』と言ってくれよう。住民の器の広さやまとまりが地区の魅力です。マラソンや着物まつりでも、地元の人への応援やエネルギーがすごいです。みなさんには、人不足を補ってもらうだけでなく、この機会に坂本を知って、好きになってもらいたい。応援し隊のみなさんにはそれが一番お願いしたいことです」。

**続けていくため欠かせない
 応援し隊の力と
 関係人口の増加**

坂本地区全体の人口は4000人を切り、高齢化率は60%近くある。過疎化と高齢化が進み、実働人員が限られるため、イベントの継続や活性化に外からの力は欠かせない。
 「お客さんとして出迎えるというより、親戚が遊びに来てくれたと思うて接しています。楽しむ感じで参加してくれたいです」。
 応援し隊として参加する団体やマラソンランナーにリピーターが多いのは、坂本の人たちの温かさや気安さにあるのかもしれない。

く時期に合わせ、毎年11月下旬に開催しており、2024年は約280名のランナーが健脚を競った。
 応援し隊の依頼は、当日の運営サポートだけでなく、大会に向けたコースの事前清掃から、「地区のみんなで力を合わせて取り組んでいます。毎年応援し隊さんの力を借りることで成り立っています」。
 ボランティアのあとは、地域の人達とふれあいの里さかもとでカレーやお弁当を食べて談話するのが恒例になっている。

応援を受けたい!

ふるさと団体の方に
お話しをお聞きました。

とくしま特選ブランド認定 仕出原のはっさくがっなく関係人口

しでの会 尾下 公隆さん(77歳・穴吹町仕出原出身)



仕出原集落のはっさくの味を 次世代へ残し、広げるために

四国一の清流といわれる穴吹川沿いの美馬市穴吹町仕出原(しではら)は、古くからはっさくの産地として有名だ。さわやかな酸味とほどよい甘さが特徴で、2016年には徳島県からとくしま特選ブランドの認定を受けている。しかし、はっさく農家は年々減り、地域の高齢化も進み、収穫時期には人手が足りなくなってきた。そんな現状を何とかしようとして立ち上がったのが、「しでの会」だ。

若い人たちの交流が 地域の人の笑顔を生み出す

ここ数年は、二日間の収穫作業に80人以上の応援し隊が参加している。高枝切りばさみを使って木から千切ったり、採果袋で枝をきれいに切り取ったり、初めての人でもできる作業がほとんどだ。参加者には小さな子どももいるため、応援し隊メンバーの配置決めや班分けには気遣いがあるが、苦ではないと話す尾下さん。

「はっさく畑は急な斜面も多いから、力のある男性には険しい方へ行ってもらったり、子ども連れには平らな場所での作業を手伝ってもらっています。毎年この集落には子どもがおらるので、毎年人は違うけど、こうやって親子で来てくれる人があったり、若い人が来てくれて、刺激になって楽しいんですよ。昼の



手分けしてはっさくを収穫する応援し隊メンバー

2月のはっさくフェアは 特別な“再会”の場所

収穫されたのはっさくは、貯蔵して完熟させ、食べ頃となった2月に出荷される。「2月の第二日曜日は、しでの会では「はっさくフェア」をしようなんです。12月に収穫に来てくれた人が買いに来てくれて、『自分がちぎった畑のを買おうか』『まよってるけどなあ』と笑いながら、よおけ買ってくれる。前の年に応援し隊で来た人がフェアを覚えていて、また翌年来てくれることもあります。そんなつながりが広がっていくことが、何より嬉しいですね。時間をかけてつながりが深まる仕出原と応援し隊の関係は、寝かせることで味わいが増す仕出原のはっさくにとてもよく似ている。

応援し隊の力を借りて 収穫に精を出す二日間

「今年も来てくれてありがとうーもう大助かりよー」と応援し隊を出迎えてくれたのは、はっさく農家の尾下公隆さん。はっさくは、霜が強くなる12月末までに出来具合を見計らって一気に収穫する。尾下さん自身も、若いころはJRに務めながら収穫の忙しい時期に帰省し手伝っていたそうだ。

『とくしま農山漁村(ふるさと)応援し隊』は、しでの会立ち上げ当初からお世話になっています。収穫時期の二日間に応援し隊が来てくれるだけで、ほとんど収穫は終わります。ほんまに助かっています」と笑顔で繰り返す。

応援を受けたい!

ふるさと団体の方に
お話しをお聞きました。

「ビッグひな祭り」40年の歩みと応援し隊がつなぐ未来

NPO法人阿波勝浦井戸端塾 国清一治さん(77歳・勝浦町出身)



地域を代表する祭りの 誕生と歩み

勝浦町の春を彩る「ビッグひな祭り」その始まりは約40年前にさかのぼる。当時、厳しい寒波で名産のみかんが収穫できなくなり、町に活気を取り戻そうと役場の有志が「町おこしグループ」を結成した。メンバーだった国清一治さんは「出せる名産がなければ創ろう」と提案し、25段を4つ組み合わせた100段のひな壇をつくる壮大な計画が動き出した。人形は一体もないところから、持ち寄りや寄贈で集まり、初回には千体が並んだ。大規模なひな壇はたちまち話題を呼び、瞬く間に全国へと知られる祭りに成長。昨年だけでも1万5000体が増えるなど、今では自然に人形が集まるまでになった。

人形整理に立ちはだかる 人手不足

祭りの知名度が高まる一方で、寄せられる人形の仕分けや整理は年々大きな負担となっている。最盛期には70名ほどいた活動メンバーも、現在は半数以下。中心となるのは20名程度で、最高齢は93歳だという。

また、人形とともに持ち込まれるケースや付属品は、木・プラスチックなどに分別し、持ち帰りを依頼するなど、細やかな作業が必要となる。冬の寒風の中で続ける作業は体力的にも厳しいことが「応援し隊」を依頼する大きな理由となった。



次々に持ち込まれる人形を仕分ける応援し隊

応援し隊が広げる 可能性

「ひな人形の受け取り作業」は毎年1月末。昨年は6団体、約23人の応援し隊が力を発揮した。2日間で600件近く集まるが、若い世代や地域に根差した企業加わり、受け取り場は活気が溢れ、作業は一気にはかどっていく。

未来へつなぐ ビッグひな祭り

阿波勝浦井戸端塾の活動は、交流の起点としても大きな役割を果たしてきた。ここ数年は恐竜の化石発掘や資源保全の活動にも力を入れ、町の賑わいを広げている。なかでもビッグひな祭りは、開催時期がみかんの出荷と重なり、市場や直売所では売上増につながり、奥座敷の坂本地区にも人を呼び込み、町全体の経済活動を活発にしている。「何より大切なのは人。手を貸してくれる人がいるから続けられる。応援し隊もその大事な一員。これからも力を貸してほしい」と国清さんは語る。2026年は「ビッグひな御殿をテーマ」に、来場者が雛人形やお内裏様に扮して写真撮影を楽しめる新しい企画も予定されている。創意工夫と人の力で進化を続けるビッグひな祭りは、これからも地域の誇りとして未来へ受け継がれていく。



応援し隊の参加者に昼食を振舞う



行灯イベント「さかもとあかりの里」

「ふれあいの里さかもと」は、1999年に廃校となった旧坂本小学校を活用して設立された。それまでも運動会や学芸会「みかん祭り」などで住民が集う、地域コミュニティの中心的存在だった小学校。その灯を絶やさない、地域と役場が協議を重ね、2002年に体験交流施設としてオープンした。

グリーンツーリズムをコンセプトにした施設は、年間1千800人程度と見込んだ利用者数を大きく超え、初年度は約8千500人が訪れた。施設があることで地域に再び賑わいが戻り、その後、秋祭りの行灯イベント復活や「坂道マラソン」開催など、新たな活動にも発展した。

応援を受けたい!

ふるさと団体の方にお話しをお聞きました。

地域の灯をつないだ「ふれあいの里さかもと」 ありがとう!そしてバトンを次の世代へ!

ふれあいの里さかもと 坂本グリーンツーリズム運営委員会(勝浦町)
新居正志(勝浦町出身・65歳)



廃校を拠点に生まれた賑わいと活動

また、徳島インディゴソックスの当時の球団代表が選手がボランティア活動を通じて人間的に成長できる機会にしたい」と新人選手の参加を促していたことも印象に残る思い出の一つだと話す。坂本地区の活動は、人材育成の場にもなっていたのだ。

「ふれあいの里さかもと」は、1999年に廃校となった旧坂本小学校を活用して設立された。それまでも運動会や学芸会「みかん祭り」などで住民が集う、地域コミュニティの中心的存在だった小学校。その灯を絶やさない、地域と役場が協議を重ね、2002年に体験交流施設としてオープンした。

人がつながり、人が育つ
応援し隊



やすらぎの森(桜・もみじ)下草刈り



「さかもと着物祭り」若手スタッフ

施設の開鎖は一つの区切りだが、23年間の活動が育んだ次世代の人材と地域の結束力が、これからの坂本地区を支えていく。そんな明るい展望で締めくくられた。

これまで地域を盛り上げてきた「ふれあいの里さかもと」だが、拠点となっていた「旧・坂本小学校」は建物の老朽化や運営コストの増大などから、2025年9月末で一般利用を終了、11月で閉鎖となる。新居氏は「施設は終わるんだけど、やってきて本当によかった」と振り返る。23年間の活動を通じて、地域のことを真剣に考えてくれる30代、40代の人達が出てきたことが何よりも嬉しい。若い世代は新しいアイデアを持っている。移住してきた人の中にも、熱心に地域活動に関わってくれる人もいる。我々も一緒にできるうちは力を貸していきたいとバトンを渡せる若手の存在を嬉しそうに話す。

地域づくりの鍵は若い世代へ



地域の梅農家を中心に立ち上げた美郷梅工房。地域で六次産業化に取り組み、収穫した梅を自ら加工して、梅干しや梅酒として販売する体制へと移行した。これにより、年間を通じた収入の確保が可能になり、会員生産者の意欲向上にもつながっている。

早期から六次産業化に取り組んできた美郷地区

応援を受けたい!

ふるさと団体の方にお話しをお聞きました。

地域の梅文化を未来へつなぐ ——美郷梅工房が描く持続のかたち

美郷梅工房
代表 藤村 和行氏(72歳・吉野川市美郷出身)



最大の繁忙期は、梅雨明けした7月中旬〜末にかけて。量も膨大なので、この工程を応援し隊のみならず手伝ってもらうと本当に助かります」と話す。「作業場は、50人くらい来てもらっても大丈夫!どんどん参加してください。梅を親指と人差し指で上部につまんで押し出してあげれば、ヘタはプツと簡単にとれる。みんなあつという間にコツを掴んで上手になっていきますよ。」

「梅商品の製造機械もメンテナンスは不可欠です。塩分と酸を扱う加工設備は

生産を支える「応援し隊」の存在とその効果

すべてステンレス製で特別なため、修理費も安くはないけれど、自分たちで部品を取り寄せ、修理するなど、会員同士で声を掛け合いながら工夫を重ねて事業を維持しています」と藤村さん。



梅のヘタ取り作業をお手伝いする応援し隊メンバー。



美郷梅工房が製造する梅干し。地元の赤しそで漬け込んでいる。

このまっすぐな姿勢こそが、地域の梅文化を未来へつなぐ鍵。ここに応援したいと手を差し伸べる人々が増えれば、きっと「美郷の梅」という唯一無二の価値を守り継ぐことができるはずだ。

美郷は中山間で梅作りに適した風土が魅力だが、後継者が見つからず梅作りをやめる梅農家が増え、その数は、最盛期の5割ほどまで減少している。一方で、全国初の「梅酒特区」の認定を受けており、美郷の梅でなければ製造できない梅酒がある。だからこそ、美郷の梅を守りたいという思いを、農家だけでなく地域内外の人たちにも広げていかなければいけない。「農家は減っているが、みんなを持ち味を生かし頑張っている。私は機械が得意だし、生産のプロもいれば、加工の知識豊富な人もいる。ふるさと応援し隊のみならずの人手を借りながら、仲間間で知恵を寄せ合ってこれからも工房の魅力を守ってほしい。」

後継者不足と地域の宝を守るために



11月に開催された「カモダニわいわいマルシェ」の様子。応援し隊もサポートとして参加。

応援を受けたい!

ふるさと団体の方にお話しをお聞きました。
「できるか」より「どうやるか」
加茂谷が選んだ地域のかたち
加茂谷RMO推進協議会の皆さん



地域に根づく チャレンジの魂

阿南市を流れる那賀川の中流域に位置する加茂谷地区。2012年発足の「加茂谷元気なまちづくり会」を起点に、多くの住民・団体が力を合わせ、地域の未来を自ら切り拓く動きが続いている。「10の町から住民が集まり、加茂谷のこれからを語り合うワークショップがまちづくり会の始まりだった」と話す山下さん。空き家の再利用や遊休農地のリ・入効率的な出荷システム「すきとく市部会」の立ち上げなど、アイデア実現に向けて活動が始まった。

2023年、まちづくり会が事務局となり、加茂谷RMO推進協議会(以下、加茂谷RMOとする)を新たに設立。農村

応援したい!

協働パートナーの方にお話しを聞きました

すだちを未来へ—— トリドールHDが徳島で描く 「共創」のかたち

トリドールホールディングス 産地開発マネージャー
吉見慶二さん(66歳・兵庫県川西市出身)



すだち収穫作業

吉見さんおすすめ、
夏季定番メニュー
「すだちおろし冷やかけ」

創業当時から続く 「すだちとうどん」 愛すべき組み合わせ

姫路濃厚豚骨ラーメン専門店「ラー麺ずんどう屋」やハワイアンカフェ「レストラン」コナズ珈琲など、食を通じて感動を届けるトリドールHD。その代表ブランド「丸亀製麺」は全国に約870店舗(2025年9月末時点)を展開し、創業当時から徳島のすだちを使用している。「いろいろ試したけど、うどんにはすだちが一番よく合うんです」と語るのは、産地開発マネージャーの吉見慶二さん。丸亀製麺の麺職人の頂点である「麵匠」もまた、すだちの香りと酸味に強いこだわりを持つという。

2024年はハウスすだち、露地すだちを仕入れ、年間で90トンを提供した。来年はさらに増える見込みだ。ところが、近年、県内の生産者の高齢化や担い

手不足が深刻化している。「このままでは、すだち文化が途絶えてしまう」との危機感から、吉見さんは徳島県や全農、県内外の方たちと、未来へすだちを繋ぐぞ!!共創プロジェクト」を立ち上げた。

社員研修としての 「応援し隊」体験

プロジェクトの立ち上げをきっかけに、生産現場のリアルを知ろうと、今年初めて「応援し隊」に挑戦。60名の丸亀製麺のエリアマネージャーを対象に、徳島のすだち収穫をお手伝いする研修を実施した。初日はすだちの歴史や収穫方法を学ぶ座学、翌日は早朝から畑に入り収穫や選果を体験。トゲで指を傷つけることもある厳しい作業に、多くの参加者が「想像以上に大変と驚いたという」。

それでも「店頭に届くすだちは本当に貴重で、選りすぐりの逸品だと実感できた」「お客様に胸を張ってすすめたい」といった声が多く寄せられた。吉見さんは「体験を通して、現場と商品が近づける喜びを感じてくれた」と手応えを語る。



座学研修

住民力×移住者力で 未来へ

加茂谷RMOの大きな特徴は、移住者とりわけ地域おこし協力隊の存在である。「募集内容がフリーミッションというのは、全国的にも珍しい自由度の高さ」と話す長谷川さんは、経験と知識を活かし、音楽・健康・交流を掛け合わせた独自の発想で地域に新しい風を吹き込む。

関さんは協力隊の任期終了後も家族で定住することを決意し、「これからは住民として、農業体験や食育、狩猟ツアー、遍路道などの歴史・自然資源を活かした農泊事業などを通じ、地域に根差した活動を広げたい」と語る。こうした挑戦を支えているのが、住民の温かな応援である。「ええなと思ったら、すぐ『やれやれ』と言っから、最近はまだ言わんとこう」とみんなが遠慮しとるといふ笑い話もある」と森岡さんは笑う。



マルシェは多彩なアーティストが出演。今年も地域おこし協力隊の長谷川さんが企画から準備まで任せられた。

すだちとともに育む 持続可能な未来

「未来へすだちを繋ぐぞ!!共創プロジェクト」では、収穫適期を逃したすだちを活用した加工品の開発に取り組み、将来的には丸亀製麺の店舗を通じた商品の全国展開も視野に入れている。吉見さんらが目指すのは、途切れさせることなく、次世代へすだちの生産体制をつなぐことだ。

「トリドールHDが出口(売り先)として機能することで、安定した取引を可能にし、若手が農業を続けられる環境整備を支援していきます。また今回のような応援し隊の体験を通して、社員が徳島や農業に関心をもち、将来的にセカンドキャリアとして徳島に移住したり、すだちや青ねぎなど県産品の生産に携わりたっても面白いですね」。さらに吉見さんは続ける。「すだちの木を守ることで山の保全ができて、次は海の環境が豊かになっていく。すると鳴門のわかめの色が濃くなり、さらに美味しくなるんですよ」。

「山海・人をつなぎ、地域の未来を守る。青く、香り高いすだちを通じた吉見さんの挑戦は、まだ始まったばかりだ。



加茂谷農泊プロジェクト。農業や狩猟などの体験を通して地域の活性化に繋げる。

加茂谷の未来は 協働で切り拓く

かつて移住者が立ち上げた「カモソン加茂谷」もかもフェスタ」は、高齢化により継続が難しくなった。しかし加茂谷の人々は、やめるのではなく形を変える道を選んだ。世代を超えた交流の場「カモダニわいわいマルシェ」になり、応援し隊の力がその地域のにぎわいを支えている。駐車場誘導やプー入運営など、応援し隊の皆さんには本当に助けられた」と事務局メンバーは口を揃える。

春には、太龍寺のふもとに遍路宿「御宿 龍龍(おんやどりゆづ)」の開業も控える。小規模特認校、農泊・民泊、オンライン交通の運動など、構想は尽きない。「人が集い、ワイワイできる場所があれば、地域は元気になれる」。そう信じ、加茂谷は協働の力で挑戦を続けていく。



選果場見学

ふるさと団体の声

毎年収穫の時期にお手伝いいただいておりますが、この事業がなくなると農業が続かなくなります。毎年助けていただき、本当に感謝しています。



地域の伝統ある祭りを守るため、毎年欠かさず応援に来てもらっています。今や、私たちの活動に無くてはならない存在です。



地域外の方々と交流することで、地元の魅力に改めて気づかされたり、新しい視点をもたらすことができます。それが活動を続ける大きな活力になっています。



かつて活動に参加してくれた方が、のちに町役場に就職してくれました！事業を通じて生まれた繋がりが、形になることを実感しています。



協働パートナーには転勤で来ている県外出身の方も多く、地域の魅力を直接知ってもらえる絶好の機会。徳島を好きになってもらえるのが嬉しいです。



協働パートナーの声

会社の社会貢献(CSR)活動の一環として参加しています。地域のお役に立てるだけでなく、移動中や作業を通じた交流で社員間の結束力が強まり、仕事のコミュニケーションにも良い影響が出ています。



本来、地域の人しか参加できないお祭りに参加したり、伝統的な里山を訪れたり、この事業がなければなかなかできない体験をすることができます。



自分たちが参加することで地域の方が喜んでくれるのが何より嬉しいです。美味しい昼食や地元の産物を用意くださる活動も多く、温かいおもてなしに感動します！



休日に参加していますが、子供と一緒に参加できるものも多く、自然の中での体験に子供も喜んでいきます。家族で充実したりフレッシュタイムを過ごさせています。



社員研修の一環として活用させていただきました。現場での実体験を通して、地域資源を守ることの重要性を肌で感じることで、非常に有意義な時間となりました。



「協働パートナー」一覧

令和8年2月現在

- | | | | | | |
|-------------------------|-------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 学校法人四国大学 | 13 徳島文理大学 | 30 東武トップツアーズ株式会社徳島支店 | 46 日本酪農協同株式会社徳島工場 | 63 ヴェオリア・ジェネッツ株式会社 中・四国支店 (吉野川営業所,阿波営業所,阿南営業所) | 78 株式会社あわえ |
| 2 一般社団法人徳島県損害保険代理業協会 | 14 徳島合同証券株式会社 | 31 徳島県・市町村国際交流協会等連絡協議会 | 47 独立行政法人水資源機構吉野川下流総合管理所 | 64 ナカガワ・アド株式会社 | 49 一般社団法人みなみ阿波観光局 |
| 3 徳島県農業協同組合中央会 | 15 中国四国農政局徳島県拠点(旧:徳島支店) | 32 株式会社日本旅行徳島支店 | 48 株式会社ジェイテクト徳島工場 | 65 株式会社リブドゥコーポレーション(徳島貞光工場) | 80 株式会社丸本 |
| 4 株式会社キョーエイ | 16 学校法人穴吹学園 | 33 日本生命保険相互会社徳島支店 | 49 株式会社アウトソーシング徳島営業所 | 66 貞光食糧工業株式会社 | 81 日本大学生物資源科学部 食品ビジネス学科農科資源開発論研究室 |
| 5 大塚製薬株式会社 | 17 株式会社メディコム | 34 株式会社パソナ パソナ・徳島支店 | 50 株式会社高橋ふとん店 | 67 BX朝日建材株式会社 | 82 南海フェリー株式会社 |
| 6 株式会社阿波銀行 | 18 徳島中央郵便局 | 35 徳島県教職員団体連合会 | 51 株式会社ハレルヤ | 68 池田福助株式会社 | 83 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科 |
| 7 株式会社徳島大正銀行 | 19 株式会社松本コンサルタント | 36 特定非営利活動法人 とくしま障がい者就労支援協議会 | 52 サントリービバレッジソリューション株式会社徳島支店 | 69 特定非営利活動法人マチトソラ | 84 株式会社Xeno |
| 8 徳島インディゴソックス球団 | 20 西精工株式会社 | 37 生活協同組合とくしま生協 | 53 株式会社伊藤園徳島支店 | 70 社会福祉法人池田博愛会 | 85 株式会社TGF |
| 9 徳島県土地改良事業団体連合会 | 21 徳島大学 | 38 株式会社あわわ | 54 徳島工業短期大学 | 71 株式会社中村両栄舎印刷所 | 86 ウェブコル株式会社 |
| 10 市岡製菓株式会社 | 22 芝商事株式会社 | 39 健祥会グループ | 55 日本フレン株式会社 | 72 有限会社三木産業 | 87 株式会社Nihonmoto |
| 11 株式会社いさわ(テニスアリーナガーデン) | 23 株式会社福村 | 40 徳島市立高等学校 | 56 特定非営利活動法人吉野川に生きる会 | 73 阿南信用金庫 | 88 奈良徳島県人会 |
| 12 株式会社イルローザ(株式会社昌栄) | 24 株式会社松浦機械製作所 | 41 美馬商事株式会社 | 57 ケイトグループ | 74 独立行政法人国立高等専門学校機構 阿南工業高等専門学校 | |
| | 25 四国建設コンサルタント株式会社 | 42 東とくしま農業協同組合 | 58 一般社団法人忌部文化研究所 | 75 株式会社ワイス技研徳島支店 | |
| | 26 東亜合成株式会社徳島工場 | 43 コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社徳島支店 | 59 キンダ化学株式会社徳島工場 | 76 サイファー・テック株式会社 | |
| | 27 徳島大学生活協同組合 | 44 徳島農大そらそらじゃ | 60 近藤化学工業株式会社徳島工場 | 77 木岐奥次世代会議 | |
| | 28 徳島ペプシコーラ販売株式会社 | 45 徳島県学校生活協同組合 | 61 山本光学株式会社(土成工場) | | |
| | 29 全日本空輸株式会社徳島支店 | | 62 中国四国農政局吉野川北岸二期農業水利事業所 | | |